

## 鳩の海

高田 友

新古今「秋上」の巻に藤原家隆の左の如き一首あり。

鳩にほの海や月の光の移ろへば波の花にも月は見えけり

「鳩の海や」と「や」の存するによりて、係り結び生じて、「月は見えける」と連體形にて終るべきにあらずや、と訝る者多し。

さは重大なる誤解なり。助詞「や」が係り結びを生ぜしむるは疑問・反語の意の場合に限らる。「鳩の海や」の「や」は、係助詞にあらずして間投助詞、俳句にいはゆる「切字」にて、「荒海や佐渡に横たふ天の川」の類なり。

また、「その言やよし」「君と相知るや久し」なと杯も、終止形にて終れるは「や」の間投助詞なればなり。

「鳩の海」は琵琶湖の異名なり。

「あふみのうみ」といふは、淡水湖なれば「あはうみ（淡海）」といひ、古代日本語の習性に随ひて「母音連續を忌避」したるによりて、「あふみ」と縮まる(apauumi→apumi→afumi)

→aumi→o:mi(o:にあらず)。而して、濱名湖の「遠き淡水湖」の義なる「遠江（とほつあふみ→とほたふみ）」(topoutapumi→tofotafumi→towotaumi→to:to:mi)に照して「近江」の字をぞ宛てける。(o:に非ずしてo:なり／る、u、j、a、a、e、a、a、æ)

琵琶湖といふは、その形状、樂器の琵琶に似たれば此かくは稱とへらる。

茲こゝに興を惹かるるは、基督傳道の聖地たるガリラヤ湖の古名「キネレト湖」なり。「キネレト」は豎琴の謂ひにして、上空より見れば洵に其の形状豎琴の如し。東西の命名に相通ずるものあり。何なんすれせ爲感嘆せられであるべけむ。

因みに、ガリラヤ湖の面積は十和田湖に匹敵し、死海は琵琶湖と大差なし。

「鳩」は水鳥「かひつぶり」の謂ひにして、琵琶湖に數多棲息するに據り、これを湖の異名とは爲したり。如今しよこん、滋賀縣の縣鳥とこそは讚へらるれ。

「波の花」は「波頭はなづ」なり。碎け散る波頭の白きを見れば、木綿にて作りたる造花なる「白木綿花しらめふばな」を聯想せしむるにあらずや。現代中國語にても、「浪花 langhua」といふは波

頭の義にして、歌謠曲杯なごにて屢々用ゐらる。本朝の「波の花」、蓋けだし唐土の言辭を訓じたるに相違なし。

萬葉不知詠人の歌に「逢坂をうち出でてみれば近江の海白木綿花に波立ちわたる」とあり。

鹽を浪の花といふは、「しほ」の語頭「し」なるを忌みて斯は呼びたる、後世に始まる呼び名に過ぎず。「浪の花」、抑々波頭、土佐日記にも「けふ海荒く、磯に雪降り、波の花咲けり」とあり。

一首の意は、「此處こゝは琵琶湖。月の光の移ろひ行くからに、宜むべなるかな、波頭を見て、秋の近きぞ知らるる」といひたるなり。

「波頭の光を見て秋を知る」とは何ぞや。

秋近づけば、月は色を變ふ。月に桂の木の植わりてあり。月桂とはこれなり。其の丈高き、千五百メートルに及ぶ。(かかる巨木の現今なほ月面探査機に據りて發見せられざるは以て異と爲すべし) 秋には紅葉するによりて、月の光の明るむならむと古人は推測したりき。

これを現代科學を以て解析すれば如何ならむ。

満月は地球を挟みて太陽の眞向ひにあり。しからばすなはち然則、冬の満月は夏の太陽と大略ほぼ同じ經路を辿る。すなはち、秋より冬へと移るにつれて、次第に高度高まりて、明るく輝くに至る。

これをしも、古人は、桂の木の紅葉せりと解したり。

月明あかければ、波頭また白く輝き、秋の來たるを知るとは歌ひたり。

豈圖らむ、月は太陽と對蹠的に、秋より冬にかけて光度・輝度を増さむとは。

望月は太陽の眞向ひ。太陽と地球を結ぶ直線上に寸分違ひなく月の來たれば、すなはち皆既月食となる。

左はそれがしが月食の戲歌ざれうた。以て嗤ひの種とは爲し給へ。「赤銅」は皆既月食の色、「此の世の影」とは「地球の影」の謂ひなり。

赤銅しやくどうに染まる望月何恥ぢて此の世の影に籠りたるらむ

望月は太陽の眞向ひ、宵の明星みやうじやう（ゆふづつ）は太陽の近邊にあれば、すなはちこれまた望月の眞向ひなり。

柿本人麻呂（萬葉）は

ひむかしの野にかぎろひの立つ見えてかへりみすれば月かたぶきぬ  
と歌ひたり。

「かぎろひ」は日の出の直前に山の端一瞬輝きて不可思議なる光芒を放つ、これなり。而して、この時に當りて振り返り見れば、西にては月没せむとす。日出づるの時に月入らむとするは、すなはち望月なるを仄めかしたり。

與謝蕪村はこの歌を本歌取りして、

菜の花や月は東に日は西に

と一句をものしたり。言ふに及ばねど、人麻呂は夜明け、蕪村は夕暮れを詠みたるなり。蕪村の句に於ても月は望月ならではあるべからず。

偕、人麻呂の一首に「かへりみすれば」とあるは、月と太陽と眞向ひにあるがゆゑに、月を見て後、振り返らずは太陽を見ること能はざるを説きたり。

「栗名月くりめいげつ」を御紹介仕らむ。舊曆九月十三日の月なり。

十三日、十四日の月は満月に近く、微かに左下の闕かけたる様、十五夜の月よりもまたあはれなる風情なきにしもあらず。

栗を食ひつつ愛づるが常なれば、「栗名月」と言ふ。

一昨年秋、住み代りて間もなき頃、我が新居は高臺にあれば、低地の全貌を俯瞰す。外に出でたるに、ああ、何爲なんすれせ感ずる所なからざらむ。ゆふづつ（金星・宵の明星）沈まむとして、目よりも下にあり。而うして高きを見れば栗名月の見事なる出でたり。

これを見て、詠みたる。

ゆふづつゆふりさけみれば栗の月冴え冴えとして秋は行くなり

「ゆ」は「より」。宵の明星より目を轉じて月を見たるなり。「かへりみすれば」にあらで「ふりさけみれば」としたるは、望月にあらずして十三日の月なれば、すでにやや高く中空に掛り、振り返らずとも空を仰げば見るを得るの謂ひなり。

「ふりさけみる」とは「あふぎみる」の義。

なほ、一昨年（令和三年）の舊曆九月十三日は新曆十月十八日。立冬は舊曆九月二十五日にして新曆十一月七日なり。栗名月、立冬に近きに據りて、「冴え冴え」とこそは申しけれ。「澄みて冷ゆる様」を言ふ。

（令和五年二月二十五日受附）